

デング熱生体実験事件

南端日誌

編集局



特別報道部

7月23日

20.7.23

1441

災害の惨禍は常に社会的弱者に集中する。お年寄りや言葉の不自由な外国人、病を抱える人……。自然災害だけでなく、福島原発事故や新型コロナウイルス禍でもそれは変わらない。

精神障害者たちもそうした窮状に置かれがちだ。精神科病院の一部では新型コロナウイルスの集団感染が発生した。だが、精神疾患を理由に感染症の専門機関への転院が拒まれたケースがあった。感染を恐れたり、病院側の通院制限で病状を悪化させる例も出ている。

災禍に直面すると、人は寛容でいられなくなる。弱者を足げにして留飲を下げる人すら現れる。ときに人身御供を

「内なる差別」には鋭敏に

話題の発掘

肯定する心理も生まれる。

最近、手にした本からそんな実例の一つを知った。戦時中に起きた精神科病院の患者に対する「デング熱生体実験事件」がそれだ。精神科医療史資料室「青柿舎」(東京)を主宰する岡田靖雄医師が編み、昨年出版された「もうひとつの戦場 戦争のなかの精神障害者/市民」に詳しい。

デング熱は蚊が媒介するデングウイルスによる感染症だが、適切な治療を受ければ死亡率は1%以下とされる。日本では戦時中に南方の戦地から持ち込まれ、最近では六年前に発生し、注目された。

ただ、戦時中は旧陸軍が対策に頭を悩ませていた。人以外に感染しないので動物実験ができない。ひそかに実施されたのが人体実験だった。

同書によると、京都大の上野陽里氏が当時の関連論文を収集。生体実験に関する三十論文のうち、十六論文が精神科の患者を対象にした実験だった。

「デング熱の感染者の血液などを患者らに注射し、感染させてデータを集めた。戦時中の人体実験については、旧満州を拠点にした関東軍防疫給水部本部(七三一部隊)による事件や九州帝国大(現九州大)での米軍捕虜生体解剖事件が有名だが、この事件もその流れにある。

当時、実験に携わった医師らの証言はない。ただ、軍の要請という「大義」とともに精神障害者に対する社会的差別から罪悪感はなかったと推察される。岡田医師は戦後、実験機関の一つの都立松沢病院に勤務したが、この事件は「隠されて」いたという。

コロナの終息は見えない。ただ、そうしたしんどい時期こそ、自らの「内なる差別」には鋭敏でありたいと思う。

× × ×

私事ですが、異動で私の担当分は今回が最終回です。ご愛読、ありがとうございました。(特報部長・田原牧)